

ストレス社会におけるメンタルヘルス支援ツール「博物館浴®」健康アプリ開発

地域共創学部
地域づくり学科
特任教授



緒方 泉

研究シーズの紹介

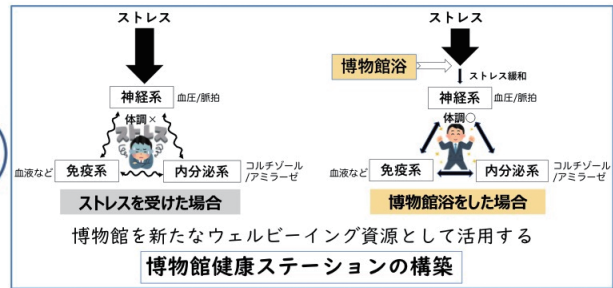
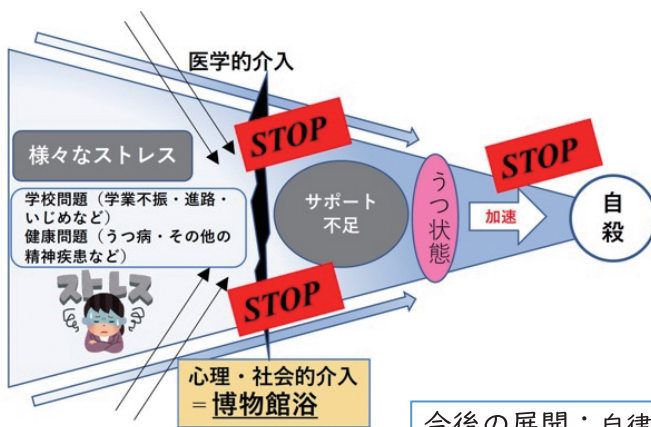
我が国は、「不登校児童生徒34万6千人（文部科学省調査）」、「若者のひきこもり65万3千人（15歳～39歳、内閣府調査）」と極めて深刻な状態となっている。カナダ、ベルギーなどの医療保険制度では、医療従事者が地域のリンクワーカーを介して、患者へ適した作品鑑賞を薬と同じように「処方」している。本研究では、作品鑑賞前後の生理・心理測定による科学的データをもとに、「博物館浴」健康アプリ開発を目指す

すものである。これは、超高齢社会、ストレス社会に対する新たな「レジリエンス」となる可能性があり、さらには博物館の価値創造、ヘルスケア産業分野にも大きなインパクトがあると期待されます。

* 博物館浴＝博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果
を人々の健康増進・疾病予防に活用する活動。
2025年2月25日、特許庁より商標を登録。

point 健康アプリ開発

- 自律神経の状態に応じた、疲労感を緩和させる作品紹介ができる。
- 世界の名画を一堂に集める、Google Art & Cultureとリンクできる。
- Google FitやAppleヘルスケアとリンクできる。



今後の展開：自律神経の状態に応じた、展覧会、作品紹介ができる、「博物館浴」健康アプリの開発

期待される活用シーン

● 市町村の医療費削減に向けた、新たな健康アプリを開発提案したいが、何かアイデアはないか？

● 健康経営を目指すため、社員の福利厚生サービスに、文化芸術分野で何かいい材料はないか？

科学的データに基づき、住民の博物館利用を促進させることで、健康寿命増進が図られ、医療費削減が可能。

健康アプリ導入により、健康状態（自律神経の変化）に応じたミュージアムや作品の紹介が可能。